

自分ひとりの死 御手洗靖大

読書猿『独学大全』（ダイアモンド社二〇二〇年九月）という本が、今年に入っても売れ続けている。独学を続けるために有効な、五五種ものセルフマネージメントの手法を紹介する本だ。自分にも生徒にも役立つ本として重宝している。

しかしながら、日々の生活を管理しようとして絶望してしまっただことがある。思った以上に一日が短いのだ。遠くにそびえていたはずの死が、東京から見える富士山のように、思いのほか簡単に、しかし自分だけに見える気がした。

二〇代の若造が何を言う、と叱られそうだ。実は昨秋、大学病院で病の告知を受けた。人生には残された時間しかないらしい。病とは、文化的なコンテキストと結ばれやすい。医療が発達し、そのまますぐに死ぬ病も少なくなつたが、やはり、自らが当事者となる瞬間、死を意識せざるをえない病もある。

そむけたる醫師の眼をにくみつづつうべなひ難きこころ昂ぶる

（明石海人『白描』）

- ・看護婦のなぐさめ言も聞きあへぬ忿りにも似るこの佞しさを
- ・診断をうべなひがたくまかりつつ扉に白き把子つをば忌む
- ・明石海人はハンセン病の告知を一人であうけた。明石には、当時の人々と同様に、ハンセン病に対する（今となつては差別的な）認識があつた。それゆえ、死と社会的な迫害とが繋がつた病を一

人で受け止めるしかなかつた。苛立ちの中には孤独感もあろう。告知を一人で受ける時、人間が死ぬときは一人であつたと思ひ知る。

受けとめるカタチしている奥歯噛み告げられている癌のあること
（笹本碧『ここはたしかに（完全版）』）

「ああ」という自分の掠れた声が出てそれを自分の耳で聞きおり

・もう既に闘っていた吾の体これから気持ちも一緒に闘う

・お隣のひとが泣いてる風の朝オレンジヤムをばきんと折りぬ
笹本碧も癌の告知を一人で受けた。あくまでも、悲観的にならないように、自らを励ますように自らを歌う。自身への眼差しはこの告知から見える。病を迎え入れる身体を見つめたのである。

笹本とは有志の歌会で一緒だった。私が早稲田に進学してからは歌会会場が早稲田となり、体調の回復していた笹本は早稲田のキャンパスに一度行ってみたいということで、現地参加の調整をしていた。が、体調の悪化でついに叶わなかつた。悔やまれる。今ならばまつすぐに言ふ夫ならば庇つてほしかつた医学書閉ぢて
（河野裕子『庭』）

夫である永田和宏とのすれ違いを歌う河野も、自分一人にだけやつてきた死と向き合ってきた。二〇二〇年が没後一〇年だつた。

自分に残された時間は数年か、七〇年か。言われてみれば、これは誰にだつて言えることだ。こんなことがあつていいはずないのだが、死ぬかもしれない疫病にさらされているこの世界の我々には、誰にだつてありえる。でも、どうか誰も無事でいて欲しい。自分ひとりの死に臨む時、歌があると言えるだろうか。